女教師彩花二十四歳

第六巻

運動会でコスプレする女性教師

―中篇―

海老沢　薫　著

内容

■著作権について
■まえがき
■第一章　怒涛のクラス対抗リレー
■海老沢薫BLOG
■海老沢薫Web連載小説
※海老沢薫BLOG
・・・最新作の出版情報や、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。
https://ebisawakaoru.blog.2nt.com/

■著作権について

「**女教師　彩花二十四歳　第六巻　運動会でコスプレする女性教師―中篇―**」（以下本書と表記する）の著作権は【海老沢薫】にあります。

・本書のすべての内容は、日本の著作権法、及び国際条約によって保護されています。

・「海老沢薫」が事前に書面をもって許可した場合を除き、本書の一部、または全部を、あらゆるデータ蓄積手段（印刷物、電子ファイル、ビデオ、テープレコーダー）により複製、流用、転載、転売することを固く禁じます。

・著作権の侵害につきましては、著作権法第119条などの罰則がありますのでご注意ください。

■まえがき

初めてクラス担任として迎える事になった運動会は、美人女性教師の彩花にとってまさに波乱の幕開けとなった。

第一種目の教師対抗コスプレ競走でおもいがけない過激な衣装を身に纏う羽目になり、大勢のギャラリーの前で恥ずかしい姿を披露した彩花。

そして、三年生の女子生徒達の騎馬戦で、さらなる羞恥地獄を味わった彩花であったが美人女性教師の試練はそれで終わりではなかった。

クラス対抗リレーで、担任教師としてアンカーを任された彩花は、クラス委員の智子の悪戯によりとんでもない姿でグラウンドを疾走し、二人三脚の競技では女性としてのプライドまで完膚なきまでに打ち砕かれてしまう。

ただ、彩花にとっての本当の悪夢はまだ始まってはいなかった。放心状態で応援席に座っている彩花の前に、一人の男子生徒が勢い

良く走って現れた時、ついに彩花にとって究極の試練が始まり、運動会はクライマックスへと向かって一気に加速していくのだった。

■第一章

怒涛のクラス対抗リレー

中学三年生の女子生徒達による騎馬戦で、大勢のギャラリーが見つめる中、半裸姿で絶頂を果たしてしまった彩花は、そのまま智子達に担がれてクラスの応援席へと戻っていた。

そしてようやく目を覚ました彩花は、両手を縛りつけていた水着はすでに解かれていたが、ビキニトップはどこかへと消えてなくなり、上半身は裸のままだった。

「お願い、私の水着を返して！」

彩花は両手で胸を隠しながら周りにいる生徒達に懇願して回ったが、水着が何処にいったのか本当に知らないのか、あるいは皆でグルになって隠しているのか分からないが、誰も美人女性教師に水着を渡す生徒も、探してあげる生徒もいなかった。

そうして、彩花は両手で剥き出しの胸を隠した姿で応援席に座り、恥ずかしそうに目の

前で繰り広げられる生徒達の競技を見守るしかなかった。

それから幾つかの競技が終わった頃、彩花は背後から突然智子達に声を掛けられた。

「先生、いつまでそんな所にボッーと座っているんですか！もうすぐクラス対抗リレーですよ」

智子達はそう言うと、彩花の腕を引っ張り無理やり立たせると、入場口の方へ半裸の担任教師を連れて向かった。

「早く入場口に行って並びましょ！」

「いやぁ、引っ張らないで」

智子達に両手を引っ張られた彩花は、剥き出しの胸を隠す事もできず、他のクラスの生徒達の好奇に満ちた視線を浴びながら入場口へと歩いた。

「北野さん達、お願い、せめて何か胸を隠せるモノを貸してくれない？」

半裸の彩花は、幾らなんでもこんな上半身丸出しの恰好で生徒達に混じってリレーを走るわけにはいかなかった。

「先生、今頃なにを言ってるんですか！胸を隠すモノなんてないですよ！」

「もうすぐ競技が始まるんですから、余計な事気にしないで、全力で走ることだけに集中してください！」

「それから先生には、今日お休みしている子の代わりに、一番初めとアンカーの二回走ってもらうので、ちゃんと頑張って下さいね」

智子達はそう言うと、羞恥に咽ぶ半裸の女性教師の姿を楽しそうに眺めた。

そんなのあんまりだわ・・・。まさか上半身裸の豹柄ビキニのボトムだけ穿いた姿でグラウンドを走る事になるとは、彩花は全く思ってもみなかった。一体、智子達は自分をどこまで辱めれば気が済むというのか、運動会の前に羞恥の命令を何も与えられなかった事

に安心していた自分の愚かさを、彩花はこの時身に沁みて感じていた。

『それでは三年生のクラス対抗リレーを始めます。選手入場！』

グラウンドの至る所に設置されたスピーカーから進行係のアナウンスの声が響くと、入場口に並んでいた三年生たちは一斉にグラウンドの中に向かって行進を始めた。

「キャッ―、ウソでしょ？まさかあんな恰好で走るつもり」

「やだわ、幾らなんでもあれは羽目を外し過ぎなんじゃない」

「まったく節操ないわねぇ」

保護者席に座る母親達は、体操着を着た生徒達に混じって豹柄ビキニボトム一枚の恰好で行進する女性教師の姿を見て、呆れた顔をしながら呟いていた。

あぁ、みんな私の事を見てるわ、恥ずかしい・・・。彩花は、さっき入場口にいる時に智子達から両手で胸を隠さないようにと、き

つく注意され、周りの生徒達と同じように元気良く腕を振って行進させられていた。その為、歩く度に揺れる豊満な乳房は生徒達の目を楽しませ、応援席からは心ない言葉を浴びせられていた。

「木元先生、オッパイ丸出しで歩いて気持ちいいですかぁ～」

「大きくて綺麗なオッパイですねぇ、後で俺達に触らせてもらえませんか？」

「木元先生、乳首勃ってますよ～」

中学一、二年生達のからかいの言葉に彩花は顔を真っ赤に染め上げながらも、しっかり前を向いて行進し続けるしかなかった。

やがて、リレーを走る三年生全員がグラウンドの中央に整列すると、各クラス半分ずつに分かれ、それぞれのスタート位置に並んだ。

リレーは男女混合で、走る順番も各クラスの裁量に任せられていた。アンカーの生徒だけがグラウンド一周を走り、それ以外の生徒は

グラウンドを半周して次の走者にバトンを渡す事になっていた。

第一走者に急遽選ばれた担任の彩花は、バトンを持ち他のクラスの生徒三人と共にスタートラインに立った。彩花が一緒に走るのは全員男子生徒で、彼らは皆厭らしい笑みを浮かべながら彩花の剥き出しの胸元に時折視線を向けていた。

こんな恰好で走らなければいけないなんて・・・。スタート目前になって、彩花は改めてあまりに酷い羞恥プレイを実感し、脚を震わせた。これから走るコース沿いには保護者席があり、彩花が今立っているスタート地点から、すでに険しい表情で自分を見つめる母親達の顔が見えた。あぁぁ、そんな恐い顔で見ないで下さい、私だって本当はこんな恥ずかしい真似はしたくないんです。彩花は心の中で母親達に向かって訴えかけた。

そしてついにスタートを告げるピストルが撃ち鳴らされ、第一走者の彩花達は一斉に走

り出したのだった。彩花は学生時代からずっと脚は早い方であったが、中学三年生の男子生徒達に比べればさすがに劣り、すぐに彼らの後を追いかける形になってしまった。

「淫乱教師！」

「露出狂！」

「メス犬！」

保護者席の前を走っていると、母親達の野次や怒号が彩花の耳元にはっきり聞こえてきた。

私、そんな女じゃない！彩花は浴びせかけられる罵声に憤りを覚えながらも、全力で走らなければならず、その豊満な乳房を上下左右に激しく揺らし、ますます保護者席に座る母親達の感情を逆撫でする事になってしまった。

「アナタ、そんなにオッパイ揺らして恥ずかしくないの！」

「幾ら胸が大きいからって、そこまで振り乱す必要ないじゃない！」

「ここは学校のグラウンドなのよ、教師なら恥を知りなさい！」

保護者席から飛び交う罵声の中を彩花は必死に走り抜けると、他の男子生徒達から少し遅れて、何とか次の走者にバトンを渡したのだった。

もうダメ、こんなの耐えられないわ・・・。

彩花はあまりの恥ずかしさに地面に座り込んで項垂れた。母親達から浴びせられた数々の罵声は、教師としてだけでなく、一人の女性として深く心に突き刺さり、彩花の心はもうほとんど折れかけていた。

「先生、良かったわよ。オッパイあんなにプルンプルンと揺らして走るなんて、さすがドスケベ教師ね」

「この調子でアンカーもしっかり務めてくださいね」

「もし、恥ずかしがって手を抜いて走ったりしたら、ただじゃおかないから覚悟しておいてください！」

智子達は、羞恥に震えている担任の女性教師に釘を刺した。

それから彩花のクラスは男子生徒達が驚異的な追い上げを見せ、いつのまにか先頭を走っていた。

「頑張れ！」

彩花のクラスは男子も女子も一丸となって、グラウンドを懸命に走るクラスメートに声援を送った。

「先生、私達絶対勝ちたいから、本気で走ってくださいよ」

「アンカーの先生で負けたりしたら、先生の恥ずかしい動画をみんなにばら撒いちゃいますからね」

すでに走り終えたありさと久美が彩花の元にやって来ると、そうトドメの脅しを掛けたのだった。

「わ、分かってるわ」

彩花は覚悟を決めると、再びアンカーとして走るためにスタート地点に向かって歩き出した。

すでにコース上では、彩花のクラスが二位に二十メートル程の差をつけて独走状態に入っていた。そして今、彩花のクラスは智子が必死の走りを見せ、アンカーの担任教師、彩花へとバトンを渡そうとしていたのだ。

「先生！」

一位で走って来た智子が大きな声で叫ぶと、スタートラインで待つ彩花は、左手で剥き出しの胸を隠しながら、右手を走って来る智子の方に差し出して構えた。

「先生、あとは頼んだわよ！」

智子はそう言って、バトンを彩花に手渡した次の瞬間、智子の手が彩花のビキニボトムのサイドの紐を引っ張ったのだった。

「キャッ―」

彩花が走り出した瞬間、女子生徒達の悲鳴が轟き、男子生徒達からは「ウォツー」という掛たたましい呻り声が響いた。

智子達から全力で走るよう脅されていた彩花は、走る事に夢中になるあまり、自分の身に何が起きているのか全く分かっていなかった。そして、腕を大きく振って剥き出しの胸を激しく揺らしながら、ただ走り続けていたのだ。

「キャッ―」、木元先生の水着全部脱げちゃった！」

「素っ裸で走るなんて信じられない！」

「先生、全然気づいてないのかなぁ？」

「露出狂だから喜んで走っているんじゃない」

女子生徒達は、美人女性教師の走る姿を見ながら薄笑いを浮かべていた。

彩花の下半身を覆っていた水着の紐は、バトンを渡すタイミングで智子の手によって解かれ、体から零れたビキニボトムはコース上

に落ちていた。そして彩花は今、ついに素っ裸でグラウンドを走っていたのだった。

「ウソだろ、こんな夢のような事があっていいのかよ」

「彩花ちゃんのアソコの毛、丸見えじゃん」

「木元先生のお尻たまんねぇ」

「俺、しっかり目に焼き付けとこう」

男子生徒達は総立ちになり、コース上を全裸で疾走する美人女性教師に釘づけになっていた。

一位でバトンを受け取った彩花はなりふり構わず胸を上下左右に激しく揺らし、懸命に走っていたが、グラウンドを半周したところで、二位を走る他のクラスのアンカーの男子生徒に急速に追い上げられ差を縮められていた。

「先生、後ろ近づいてきているから逃げて！」

「抜かれたら許さないわよ！」

智子達は走っている彩花の方に近づき檄を飛ばした。

そんな・・・。後ろに男子生徒が迫って来ている事を知った彩花は、持てる力を振り絞り全力で走り続けた。しかし、さすがに中学三年生の足の速い男子生徒の脚力には勝てず、徐々に差を縮められ、その差はもう数メートルにまで迫っていた。それはまるで、男子生徒に襲われた全裸の美人女性教師が必死に逃げている姿のようにも見え、大勢のギャラリーの加虐心を煽った。

ゴールが近づいて来る中、素っ裸の彩花は再び保護者席の前を駆け抜けていた。

「淫行教師！」

「アソコの毛まで丸出しにして恥ずかしくないの！」

「素っ裸で走るなんてどういうつもり！」

母親達の罵声が聞こえた彩花は、走りながらふと自分の下半身を見たのだった。

キャッ―、ウソでしょ。私、どうして素っ裸になってるの・・・。彩花はその時初めていつのまにか水着が脱げ落ち、全裸で走って

いることに気づいた。恥ずかしい・・・。彩花は心の中で悲鳴を上げると急に失速し、ゴールテープまで残り三メートルの所で後ろから走って来た男子生徒に一気に追い抜かれてしまった。

「先生、何やってるのよ！」

彩花を追い抜いた男子生徒が一位でゴールし、無惨にも直前で追い抜かれて二位でゴールした担任教師に対して、彩花のクラスの生徒達は大ブーイングを浴びせた。

「ごめんなさい・・・」

彩花は今にも泣きそうな顔で、両手で胸と股間を隠しながら、クラスの生徒達に深々と頭を下げて謝った。

■海老沢薫ＢＬＯＧ

・・・最新作の出版情報や、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

https://ebisawakaoru.blog.2nt.com/

■そのほかＳＮＳ

https://x.com/ebisawa_K

https://www.instagram.com/kaoru_ebisawa/

https://www.pixiv.net/users/70200870

■海老沢薫Ｗｅｂ連載小説

『清楚な美人妻　彩２７歳　絵画モデル編』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=9281

『清純派女優　結衣２４歳－国民のペットへと堕ちていくヒロイン－』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18802

『清純派女優　結衣２４歳－女神の憂鬱－』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=26675

『女教師　玲奈２５歳－女性教諭の前代未聞の不祥事－』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=17186

『美人社長　里帆２６歳－若き女社長のプライドを砕く屈辱の契約－』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18885